詩編　第19編　1節

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」

猛暑の季節が終わりつつあり、少し涼し気な風が時折吹き抜ける。それでも、時折残暑が続き、なかなか終わらない夏は日によって居座る。それでも、季節は虫の音色といっしょに進んでいる。

そんな日和、散歩する近所の方と時々擦れ違う。そのたびに、両手をあげて、今日は良い天気ですね、と声をかけてくださる。暑い日も涼しい日も笑顔で、両手をあげ、空をその手で讃えるように、支えるようにして今日は良い天気ですね、と言われる。その後は後ろに手を組みながら、静かにゆっくり散歩を続ける。青空や白い雲が流れる空の下、立ち止まり、両手をあげて良い天気を喜ぶ姿は見る者に清々しさを与える。

その空の青さ、広さ、その流れる雲の軽さ、白さに手を上げ喜ぶ先に、さらに喜ぶべきことがある。それは、ひろがる天に目的がある。神の栄光を語り告げる。大空に目的がある。御手のわざを告げ知らせる。両手をあげるさきに、神の栄光、御手のわざがあり、そして、その栄光の、わざを成される神がおられる。

天にあげる両手、喜び仰ぐ顔をご覧になって喜ばれる神がそこにおられる。

2022年8月31日